別院探訪

題字揮毫　大谷暢顯　真宗大谷派第二十五代門首

東本願寺

別院探訪
目次

『別院探訪』刊行にあたって　真宗大谷派 宗務総長　安原 晃　4
別院の由緒と今を訪ねて　大谷大学教授　木場 明志　6

札幌別院　17
函館別院　21
旭川別院　25
帯広別院　29
根室別院　33
江差別院　37
東北別院　41
原町別院　45
横浜別院　49
甲府別院　53
三条別院　57
高田別院　61
新井別院　65
富山別院　69
井波別院　73
城端別院　77
金沢別院　81
鶴来別院　85
福井別院　89
吉崎別院　93
高山別院　97
大垣別院　101
高須別院　105
岐阜別院　109
竹鼻別院　113
笠松別院　117
三河別院　121
豊橋別院　125
赤羽別院　129
静岡別院　133
名古屋別院　137
桑名別院　141
長浜別院　145
五村別院　149
赤野井別院　153
大津別院　157
山科別院　161
岡崎別院　165
伏見別院　169
難波別院　173
天満別院　177
八尾別院　181
茨木別院　185
大和大谷別院　189
姫路船場別院　193
赤穂別院　197
広島別院　201
土佐別院　205
四日市別院　209
佐世保別院　213
鹿児島別院　217
沖縄別院　221
ブラジル別院　225
ロサンゼルス別院　229
ハワイ別院　233
別院年表　238
別院分布図　240
著者・写真家紹介　242

『別院探訪』刊行にあたって

宗務総長　安原　晃

私の生家である上越市の国府光源寺は、もともと「高田別院国府支院」とされた寺でありました。子どものころ、時折「別院からご使僧が来られる」と、家族一同でお出迎えをしていたことを思い出すことがあります。この高田別院は、徳川幕府における新寺造立の禁令を乗り越え、越後高田のお同行の願いによって建立されたという沿革を持ち、「身動きできぬおたや参り」と伝えられたほどの隆盛を誇りました。

その後、縁あって入寺した現在の自坊がある三条教区には、壮大な本堂を有する三条別院があります。三条別院は貞享年間（一六八四～八七）に越後国（新潟県）、さらには信濃国（長野県）をも巻き込んだ宗義論争を契機に、地域門徒の信仰の象徴として建立されました。その際、現在高田教区に属する新井別院も同時期に建立されています。

このように、私自身が深いご縁を感ずる新潟県の別院ですが、それぞれ非常に大切で示唆に富んだ設立の経緯を持っています。そこには図らずも、幾多のお同行が設立を願い支えてこられたという歴史と、地域の中心的な「念仏の道場」という、別院存立の本義が示されているように思われてなりません。

真宗大谷派には、日本全国に五十二カ寺、海外開教区に三カ寺の別院があります。それぞれに独自の、そして大変に興味深い沿革を有しており、いずれも地域における真宗門徒の歴史的事実があり、佛法興隆の中心的存在たれという使命が通底しています。別院の設立と変遷の歴史、それはまさしく地域のお同行の信仰の歩み、宗祖のみ教えに聞かんとする人びとの躍動のしるしなのでしょう。

本書『別院探訪』は、当派機関誌『真宗』の表紙企画として二〇〇〇（平成十二）年七月号から二〇〇四（平成十六）年十二月号まで連載された写真と記事を基としています。連載では、全国に存在する別院の「これまで」を文字として、「いま」を写真として記録してきました。これらを見つめ直すことで、私たちの教団を支えてきてくださった先達の願いと、今日の私たちのなすべきことが、見えてくると思います。別院の「これから」は、まさに今、教団にご縁をいただく私たち一人ひとりにかかっていると申しても過言ではありません。

本書を手に取り、どうか実際に各地の別院を訪れていただきたいと思います。また、たとえ足を運ぶことが叶わなくとも、本書を読むことで、各地に残る信仰の歩みに思いを馳せていただくことを願っております。

末尾ながら、本書の刊行にあたって、『真宗』誌連載当初から深く携わっていただき、単行本化に向けて総序「別院の由緒と今を訪ねて」をご執筆いただきながら、その途上で病に倒れられ、現在懸命のリハビリを続けておられる大谷大学教授・木場明志氏に、万感を込めて感謝の言葉を申しあげるとともに、各回の表紙を荘重かつ重厚な写真で飾っていただいた写真家・川村赳夫氏、そして各連載において本文をご執筆いただいた諸氏にも、深甚の謝意を申しあげます。

別院の由緒と今を訪ねて

大谷大学教授　木場明志

別院の前身は御坊と触頭

別院は「御坊さん」と通称されて地域に親しまれ、古い由緒を想わせる荘重な構えを見せる場合が多い。そうかと思えば、明治時代以降の開教拠点であったという比較的新しい由緒の場合、あるいは、戦災で焼けて以後はまったく新しい鉄筋建築となり、由緒をあまり感じさせない場合もある。別院とは何か。あらためて真宗大谷派における別院の歴史を見直し、よりいっそう親しみやすい場とするために、全国五十二別院および海外三別院の由緒と現況を現地に訪ねることにする。そこでは、宗義宣布・儀式執行・地域教化の拠点として、日々に尽力しつつある各別院の姿が見える。今日も、生きた信仰を育む活動を目指してたゆまない取り組みを続けているのが別院である。本書によって、近隣の人びとや地域のご門徒はもとより、遠来の参詣者にとっても、別院がさらに身近な存在となるよう願って、ガイドブックを兼ねて別院を探訪しようと思う。

「別院」という呼び名の始まりを尋ねれば、それは一八七六(明治九)年十月である。江戸時代には、本末制度と称される複雑に重なり合う本山から末寺までの教団構造が、長期間のうちに形成されてきた。とくに、地域における大坊・大寺院であった「御坊」は、地域門徒の結集の場として重要な位置にあるとともに、教団構造の中においては地方に位置する地方本山(中本山)として、本山と末寺・門徒を繋ぐ重要な役割を果たしてきた。いわば宗派における地方宗務機関であったわけである。この御坊は、一六〇二(慶長七)年に本願寺が東西二派に分立して東本願寺派(明治以降は真宗大谷派)ができた時、それを率いた本願寺十二代教如上人に深く開創において関わる寺院、あるいは上人に従った本願寺との由緒がある寺院などを、御坊・御堂・掛所・懸所・末刹などの名称で格別に取り立てたのだった。その数は徐々に増し、本山からは輪番が派遣されて宗務を担当したが、主な御坊は本山宗主が住職を兼任し、または宗主の兄弟・一族(連枝という)が住職に就く場合もあった。いずれも地方においては別格の扱いを受けていたことが共通する。

一方、地方宗務機関としては、幕府や在地の大名家と教団とを繋いで地方藩内の末寺を管轄する触頭というものもあった。こちらは地方の有力寺院が大名から選任されることが多く、御坊が触頭を兼ねることもあったが、触頭はあくまで幕府・諸藩との関係において任命されていた。

したがって、明治時代となって幕府・藩が消滅するにおよんで、触頭寺院は無意味となり、さらに、一八七六(明治九)年に『宗規綱領』が制定されて先の本末制度が廃止されたため、御坊レベルの地方有力寺院の扱いを新たに定める必要性が生じたのであった。そこに「別院」と称する寺院が規定されることになった。

別院の役割と定義

明治期を迎えた真宗教団は、廃仏毀釈などを経験して地方を含めた教団体制の立て直しを迫られ、本山寺務を末寺住職の代表が執りながらも、本山・宗主中心の中央集権的な体制に移行した。近代的な教団へと再生するために、真宗四派(東本願寺派・西本願寺派・仏光寺派・錦織寺派)はまず共同で『宗規綱領』を作り、寺院を本山および末寺の二つに分け、さらに末寺を別院・一般末寺・道場・本寺支坊の四種類とした。別院とされたのは江戸時代に御坊などの名称を付されてきた地方有力寺院や、明治以降の開教拠点寺院などであった。御坊などは、それまでは地方宗務機関の位置にあったが、新たに主要地に寺務出張所が設けられ、地方宗務はそちらに移された。それによって「別院」は末寺の一種となったのである。

その後、一八九七(明治三十)年に教区制が設けられ、当初は国内を二十四教区に分けて各地に地方教務所が置かれた。ただし、既存の寺務出張所がある地には教務所は置かれず、寺務出張所と教務所によって地方宗務を担当することになった。この体制は、それぞれの増減などを経ながら、寺務出張所も教務所として編成し直し、現在まで続いている。多くの場合、別院境内に隣接、あるいは別院の一角に教務所があるように見える現況は、こうしてできあがった。しかし、教務所がまったく別院と離れた地に置かれていることもある。

となると、別院の役割は何であろうか。別院を含む末寺の四種類は、一時、連枝が住職である別院を別格別院と称するなどの変遷の後、一九二九(昭和四)年制定の『真宗大谷派宗憲』で別院・支院・一般末寺・支坊に改められ、一九八一(昭和五十六)年制定の現行『真宗大谷派宗憲』では、別院・普通寺院の二種類へと整理されている。それでも別院は普通寺院とは違い、住職には門首あるいはそ

れに代わる者が就くと規定される格別な扱いではある。同年には『別院条例』も公布されたが、改正を経た現行条例では、

【別院の目的】別院は、その地域の教化の中心道場として堂宇を備え、本尊を安置し、教義を宣布し、儀式を執行し、僧侶及び門徒を教化育成し、教区又は開教区の機関及び施設との緊密な連携のもとに、地方の特性に応じて教化に必要な業務を行い、もって同朋社会を実現することを目的とする。

【別院の設置等】別院は、枢要の地又は開教上必要のある地、若しくは由緒によりこれを設け、その地方の弘教の中心とする。

とされている。すなわち、「地域の教化の中心道場」と位置づけられ、①宗派にとって枢要の地　②明治以降の開教事業における必要の地　③宗派にとって重要な由緒を持つ寺院である場合、のどれか一つ以上に該当して設置されていることになる。

①の枢要の地とは、地域教化にとって枢要の地ということである。江戸時代初期の東西分派によって東本願寺派(真宗大谷派)が形成されて以来、教団が地方における教化編成と教化を進める上に多大な実績を残してきた地、および現在・将来も拠点としての機能が見込まれる地を指す。本山のある京都から見た地方(東京・大阪も含む)の政治的重要地、あるいは東派門徒の極めて多い地域、あるいは他派・他宗教などとの関係から拠点を確保したい地、さらに、明治以降においても重要地とみなされた地に経営されてきた名刹を中心に取り立てている。難波別院・名古屋別院・福井別院・金沢別院・三条別院・高田別院などが代表である。

②の開教上必要の地とは、主に明治維新期以降に重点的に布教が進められた拠点地を指す。札幌別院・帯広別院・根室別院などの北海道内別院はまさに開教拠点地に設けられた。また、以前からの布教を踏まえた重要地指定としては函館別院・鹿児島別院、新規取り立てとして静岡別院などがある。さらに、明治以後には開教拠点地づくりは海外におよび、ホノルルのハワイ別院、北米のロサンゼルス別院、敗戦後には南米サンパウロのブラジル別院を生み出してきた。札幌別院・鹿児島別院など本山主導で設けられる場合、三河別院・広島別院のように他派との関係や派内事情を重視して別院に取り立てることもあった。なお、別院は本来、国内に敷かれた教区制によって地方教務所の指導を受ける教化施設であるが、

海外の場合は敗戦前は教区としてのまとまりを持つとされておらず、海外開教区の名称で一括して本山が指導していた。現在はハワイ開教区・北米開教区・南米開教区と区分される。

また、二〇一〇(平成二十二)年には沖縄準開教区に、東本願寺沖縄別院が設立された。

③の由緒により設けるとは、東西本願寺の分立以前および以後を含む、東本願寺勢力の伸張に関わった歴史的由緒を持つ寺院、あるいはそれ以前にまで遡る深いゆかりの寺院を取り立てた場合である。もっとも多いのは分立を率いた教如上人が開創・再建した大津別院・五村別院・八尾別院・天満別院・難波別院などであり、別院(御坊)数全体の三分の一にあたる十七例におよぶ。江戸期には次に一如上人に関係する由緒が多く、数の上では明治期の厳如上人創立の別院は十二例で二番目に多い。また、北陸教線の基盤を築いた綽如上人による南北朝時代の創建で、一向一揆では越中門徒の拠点となり、しかも江戸時代に末寺を率いて西派から東派に転じた由緒を持つ井波別院、さらには東派に連なる門徒を多数生み出した蓮如上人ゆかりの吉崎別院・赤野井別院・城端別院などがある。由緒を誇る一方、世の盛衰によって直属の崇敬門徒が減少したり、地の利に恵まれず多数の参詣が望めなかったり、あまりの大伽藍のために修繕が追いつかなかったり、現状において維持経営へ地元の苦労が絶えない別院もある。①の類型とは重複する場合があり、多くは「御坊」などと称されてきた地方の名刹寺院である。

江戸時代の御坊の名残

「別院」の名称は明治以降のことであるが、取り立てられた地方名刹については、江戸時代初期の教如上人御消息には「金沢末刹」「茨木御堂」「長浜御堂」などと記され、続く宣如上人御消息では「金沢末寺」「勢州桑名末寺」などと見えている。明治初期には、厳如上人御消息に「石狩国札幌管刹」とあるように、一八七三(明治六)年三月に御坊の名称が廃されて「管刹」となったが、これは一八七六(明治九)年十月の「別院」への改称までの短期間であった。江戸時代に御坊の称を持った地方有力寺院の数を正確に把握できる史料には恵まれないが、幕末の一八六四(元治元)年七月十九・二十日に起こった、禁門の変による京都市中兵火での本山全焼を門末に伝えるために「諸御坊並びに触頭」に通知した文書(『上檀間日記』一八六四年七月二〇日条)には、「御坊」が列挙されている。

それによれば、

大阪御坊・摂州天満御坊・泉州堺御坊・河州八尾御坊・摂州茨木御坊・江州赤ノ井御坊・江州長浜御坊・江州五村御坊・濃州平尾御坊・濃州小熊御坊・濃州竹ケ鼻御坊・勢州桑名御坊・尾州名古屋御坊・三州吉田御坊・飛州高山御坊・越前福井御坊・吉崎御坊・越中城端御坊・越中井波御坊・越後新井高田御坊・越後三条御坊・播州姫路御坊・豊前四日市御坊・芸州広島御坊・肥後熊本御坊・筑後柳川御坊・筑後久留米御坊・和州大谷御坊・和州南部御坊・和州御所町御坊・河州守口御坊・河州枚方御坊・摂州有馬御坊・摂州平野御坊・和州箸尾御坊・富田御坊・濃州大垣御坊・濃州神戸御坊・越前御坊・越前大味浦御坊・加州金沢御坊・遠州金谷御坊・遠州掛川御坊・甲府御坊・播州赤穂御坊・伊予宇和島御坊・紀州和歌山御坊・肥前島原御坊・肥前長崎御坊・三州赤羽根御坊・土州高知御坊・肥前唐津御坊

の五十二御坊が挙げられており、一八七六(明治九)年の別院取り立てがすべての御坊におよぶものではなったことが知られよう。明治初期における旧御坊の寺勢や拠点地の再編成が影響した別院取り立てであったとわかる。

また、各地域で末寺・支坊を有する寺院が地名を冠して何々「御坊」・「御堂」と地域独自で通称された御坊もあった。

現在は廃院となった大谷派の別院の例

現在の真宗大谷派別院は、国内五十二、海外三カ所を数える。しかし、その数は一定ではなく、現行の『別院条例』にも別院の設置および廃止は宗議会が決定すると規定されているように、別院は時代の要求や実地の状況によって改廃がなされることもある地方教化施設である。ここでは、かつては別院として置かれていて、その後に廃止されて現在はない別院について略記する。なお、別院という称号は一八七六(明治九)年十月から用いられるようになったことは前述の通りである。

まず、国内で廃止に至った別院についてみれば、一九一一(明治四十四)年、親鸞聖人六百五十回大遠忌を記念して『本願寺誌要』が刊行されたが、そこには別院とその由緒についての一覧記事があるので現在と比較対照できる。また、一九三七(昭和十二)年刊行の『大谷派達令類纂』に当時の別院一覧を挙げていて参照できる。廃院の理由は派内事情の変容によるものが多い。

次に、現在の海外別院は南北アメリカの三カ所に営まれるが、敗戦前は台湾・朝鮮半島・中国華北華中地方・中国東北地方・樺太(サハリン)などの東アジア地域に開教が行われたため、拠点地に別院が置かれた歴史的経緯がある。真宗大谷派では敗戦後の一九六九(昭和四十四)に『開教年表』を刊行(和文タイプ版)しており、それによって今はなくなった海外別院を列挙することができる。なお、海外別院は初め布教所として開設され、のちに発展して別院に昇格する例が多いが、ここでは別院として取り立てられた年代の順に記すことにする。なお、そのすべてが一九四五(昭和二十)年の敗戦を契機に、在勤者の日本引き揚げとともに、一九四六(昭和二十一)年末までに廃院の運命をたどっている。日本人のアジア進出とともに東アジアに経営された海外別院・布教所などの海外開教には、延べ九百人の大谷派僧侶が海を渡って現地に赴任した。布教は人の移動に伴って行われるのが基本であり、門徒が海外に移動すれば僧侶もまた海外に移動した。敗戦によって現地に日本人がいなくなれば、必然的に布教もまた中止の止むなきに至った。

日本のアジア進出と海外開教については、当時の政府の施策や行動と非常に関連し、当時の日本の侵略的行動とも関連があるため、さらなる検討を要する。

■廃院となった国内の別院の例

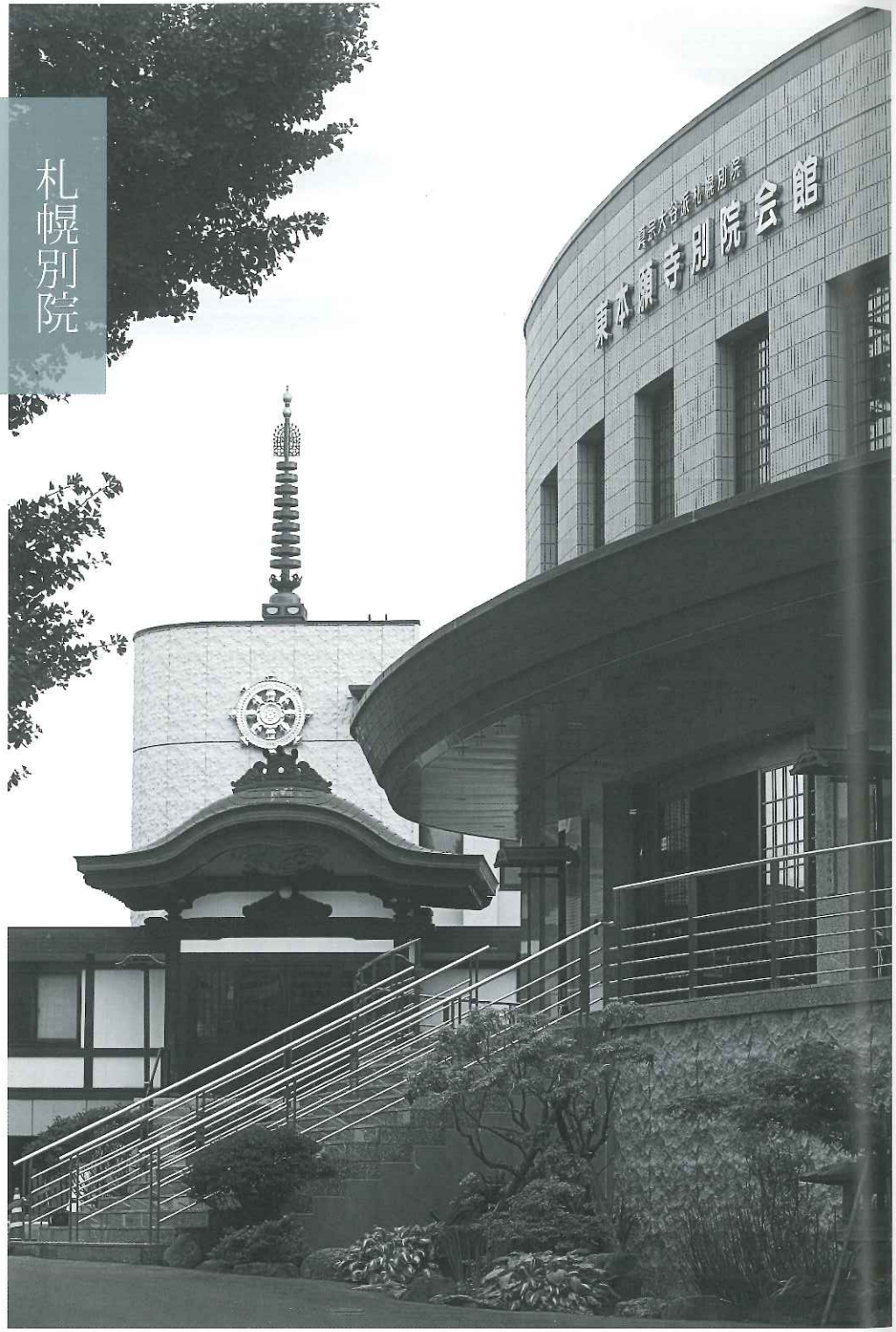
大谷別院……江戸時代に大谷御坊と称されていた現在の京都東山の大谷祖廟は、明治以後は大谷別院という扱いであった。宗祖墓所にゆかりの地に営まれ、宗祖を慕う多数の門徒の墓所(東大谷)を隣接させて現存するが、現在は祖廟の地を『真宗大谷派宗憲』で「真宗本廟(本山)飛地境内」と規定したことから、別院と称しない。

新家別院……奈良県葛城郡馬見付には新家別院長福寺があった。在地の東本願寺初期教学者である慶秀を教如上人が賞し、京都七条堀川の寺内にあった長福寺を与えて創始されたという。一六九七(元禄十)年には本山掛所となり、新家御坊と称された由緒があった。大和大谷別院に近いことから、同別院に合併された。

堺別院……大阪府堺市櫛屋町に営まれた。一九七一(昭和四十六)年からは難波別院堺支院として扱われている。

浅草別院……一五九一(天正十九)年に教如上人が徳川家康から江戸神田に寺地を得て営んだ光瑞寺に発し、一六〇九(慶長十四)には神田明神下に移転、一六三〇(寛永七)年には「神田本願寺」と称されていた。その後、一六五八(明暦四)年の江戸大火に類焼したが、同年中に

札幌別院



北海道には、六つの当派別院がある。それぞれに歴史があり、今もなお宗祖親鸞聖人のみ教えを聞きひろめる聞法の道場として、教化の中心になっている。

札幌別院は北海道庁所在地である札幌市の中心部に位置し、北海道開拓・開教の拠点となった。

札幌別院をはじめとする道内の別院と明治新政府の政策とは、深い関係がある。ロシアの南下政策が急迫し、北海道の開拓を早急に着手することにせまられた新政府であったが、財政難のために開拓を自弁で行うことが困難な状況にあった。

一八六九(明治二)年、東本願寺は政府に対して「新道切開」・「移民奨励」・「教化普及」を要旨とした願書を提出して、同年八月に許可を得、札幌の地に開拓・開教の第一歩を踏み出すことになった。

この間、政府は北海道・樺太を統治するために、「蝦夷地」を「北海道」と命名し、十一ヵ国八十六郡に区分し、その中心を札幌としていた。同時に、道内における政府の拠点であった函館と札幌をつなぐ幹線道路が必要となった。東本願寺は、このような状況のもとで、政府に対する「出願」によって開拓・開教を推し進めていくこととなったが、この施策と行動には、アイヌ民族への

差別と抑圧など、現在に至るさまざまな課題を残している。

一八七〇(明治三)年二月、「開教」の責任者となった当時の東本願寺法嗣現如上人(大谷光瑩)は、随員百数十名とともに京都を出発し、各地で開拓・開教に必要とされる経費の寄附を募りながら日本海側を北進し、七月に函館に入港した。同月中に札幌に到着すると、東本願寺管刹地を検分した。検分後、この地に草葺きの仮堂が建てられ、御本尊が安置された。当時の札幌には神社もなく、他宗他派の説教場もなく、「東本願寺管刹」が、最初でかつ唯一の宗教施設であった。

この仮堂から本堂への改築は、一八七一(明治四)年、越後国光圓寺(新潟県新潟市江南区沢海)の古御堂を札幌別院本堂に移築することによって成った。御堂は日本海を経由して運ばれ、陸路は当然人馬によった。現在の「旧御堂」がそれにあたる。

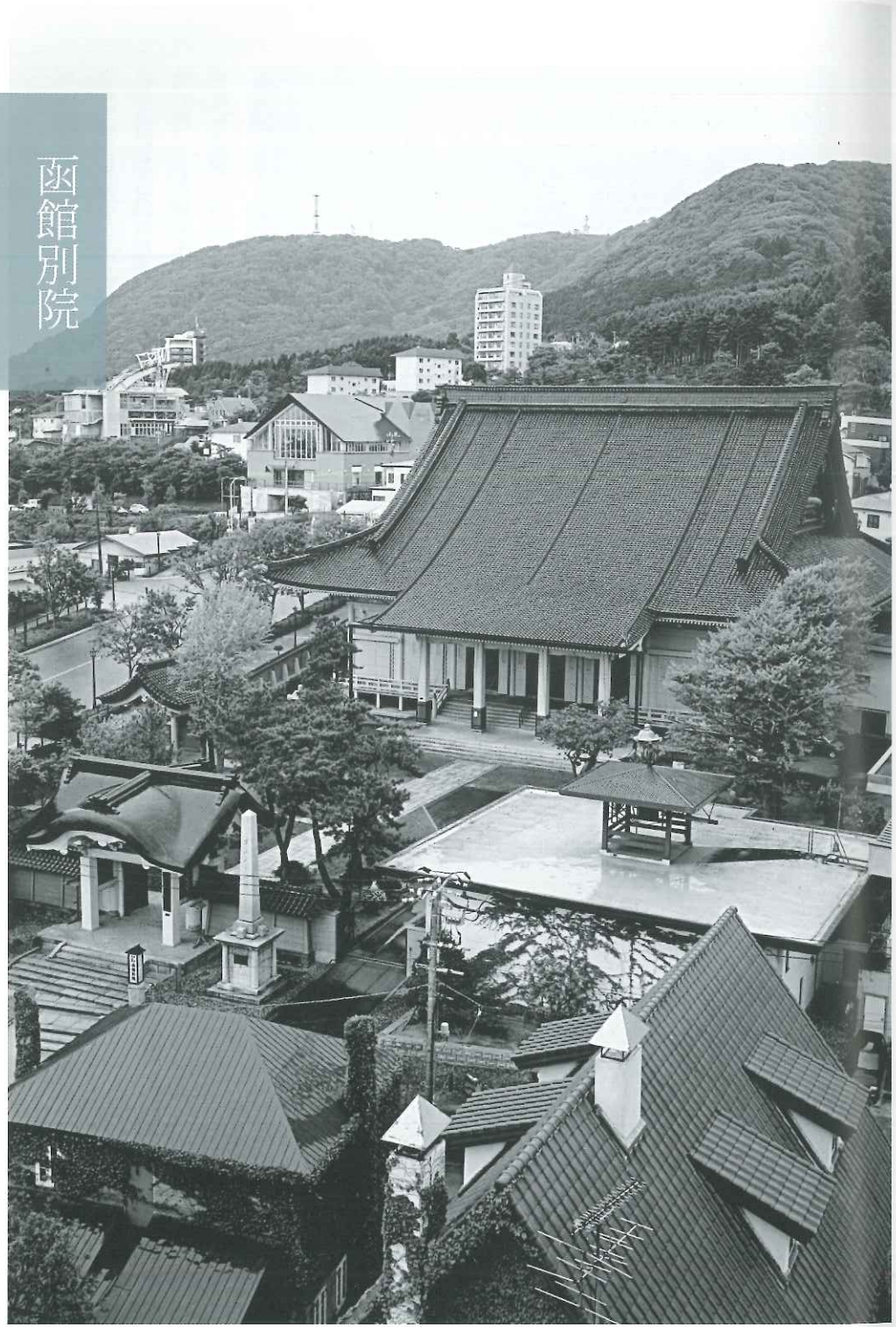
現在の本堂(前頁写真)は、一八九〇(明治二十三)年に起工され、翌年に落成して、一八九二(明治二十五)年八月二十六日に遷仏式が執り行われている。その他、境内には鐘楼堂・別院会館などがあり、境内地は九千余坪の広さがある。

札幌別院では、維新期の混乱の中で、別院創建にご尽力された人びとのご遺徳を偲び、毎年七月二十三、二十四日に創立記念法要が厳修されており、二〇〇〇(平成十二)年には創立百三十周年を迎えた。二〇〇五(平成十七)年、蓮如上人五百回御遠忌の厳修に併せ、総合整備事業としての本堂・旧御堂の修復及び札幌別院東本願寺会館の新築が成っている。

なお、北支院、北三條支院、豊白支院、圓山支院、山鼻支院、現来寺支院の六支院が札幌市内にある。

[文/木場明志]

函館別院

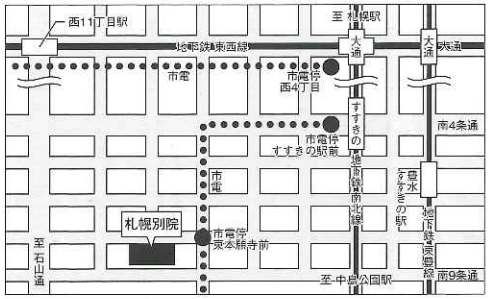


年間行事

1月1日	修正会
1月12日	婦人会新年会
2月7～8日	開基現如上人御祥月
3月(彼岸中日の前後各3日間)	春季彼岸会・永代経法要
5月1日	親鸞聖人誕生法要・誕生児初参り式
5月12日	婦人会御廟参り
7月1～3日	暁天講座
7月23～24日	創立記念法要
8月13～16日	盂蘭盆会
9月12日	婦人会報恩講
9月(彼岸中日の前後各3日間)	秋季彼岸会・永代経法要
10月1～14日	支院報恩講
10月23～28日	報恩講
11月27～28日	宗祖聖人御正忌〈祖徳讃仰の集い〉
12月31日	除夜の鐘

アクセス

札幌別院

〒064-0807北海道札幌市中央区南7条西8丁目290番地
Tel. 011-511-0502 Fax. 011-521-4339
URL http://www.ohigashi.or.jp
E-mail ohigashi@abeam.ocn.ne.jp

[電車] JR「札幌駅」下車、市営地下鉄南北線乗換え「すすきの駅」下車、市電乗換え「東本願寺前」下車徒歩1分
[自動車] 新千歳空港より車で1時間